

第3学年美術科学習指導案

日 時	平成 21 年 11 月 17 日	6 校時
生 徒	3 年 6 組	男子 18 名 女子 19 名 計 37 名
場 所	第 2 美術室	
指導者	紫波町立紫波第一中学校 教諭 高橋 知志	

1 単 元（題材名） 篆刻の制作～自分だけの蔵書印を作ろう～ 【A 表現】

2 題材について

（1）教材について

工芸の題材である。美術の学習で篆刻に取り組む学校は昔から多くある。しかし篆刻は厳密に言えば「書」の領域であるらしい。篆刻は基本的に古い文字を印に刻むものである。中国の殷の時代にさかのぼる古代文字をはじめ、秦の時代の小篆、漢印の様式である印章などの字体をアレンジして方寸（3 cm 四方）に集約する作業は、確かに書の学習なくしてはなしえないことである。

そういうことからか、造形教育で取り上げる篆刻の制作は彫刻が容易な軟石材を材料としていることから、鈕（印の握りの部分）の丸彫り彫刻を制作の中心に据えることが多い。結果として、その作品は立派に彫刻されてはいるものの、あまりに繊細な造りであることが多く、道具としての実用性を度外視したものになりがちであった。また、一方で肝心の印面のデザインが稚拙で、生徒が実生活でその印に愛着を持って使用することは思えないようなものであった。これでは工芸領域の目指すところである「用と美の調和」が構想されているとはいえない。

美術教育が目指すのは「心豊かな生活の創造」「心豊かに生きることと美術とのかかわり」に関して生徒の関心意欲や能力を高めていくことである。そこで「使えないもの」を制作させるのでは意味がない。やはり「道具としての印」に焦点を当てなおしたい。調和の取れた文字のレイアウトの工夫、古代文字の美しさの感受を促して制作をさせることを大事にしつつ、様式にとらわれないオリジナルなデザインを広く許容して自分らしい印面の構想を立てさせることを中心に据えたいと考える。また、鈕の仕上げは丸彫りではなく「側款」を入れるなど、道具としての篆刻の完成度を高めていくことを目標とさせたい。そして、篆刻の歴史を学んだり、古今の優れた作品を鑑賞したりする活動を通して、生徒が自分自身の生活の中に「印を使用するという東洋独自の文化」を取り入れていく意欲や態度を養うことを目標としたいと考える。

（2）生徒について

中学校段階では、観察力と主題の発想・構想とそれを実際に具体化していく表現技法の習熟がアンバランス（イメージと表現のギャップ）であるために制作活動に意欲を失う例が少なくない。さらに、自分が抱いた造形イメージを表現するために、自らの造形

技術を向上させようとしたりする意欲に欠けるため、安易に妥協し、表現の質が高まらないまま活動を終了させてしまう生徒が多い。構想段階でも自分で主体的に発想の幅を広げ、オリジナルなものを求めて追究していく姿勢が弱く、参考作品のコピーで満足してしまうケースも少なくない（H20 美術科教科総論より）。

既製品が溢れる現代社会の中にあって生活を「カスタマイズ」する傾向は、むしろ強まっているように感じる。だからこそ、ただ単に流行に流されることなく、自己理解を深め、より自分らしさを追究していく姿勢を持ってこれからの生活に向き合っ欲しいと考えている。美術教育がなすべき役割が大きいと考える所以である。

本学級の生徒は他の3学年学級の例に漏れず男女間の学習定着度の差が大きい。聞き取る力についても男子の習熟度が不足しており、そのため制作に入るとどうしても自己流で取り組んでしまうために困難に突き当たることが多く、解決できずに投げ出してしまふ傾向がある。一方、女子生徒については意欲的な生徒が多いが、創意工夫の面で妥協してしまい、完成させる作品が無難で、技術的にも平均的な水準の域を脱しない。

（3）授業について（表現力について）

今回は制作テーマを「蔵書印」とし、自己の生活・自己の成長と読書のかかわり、すなわち「愛書精神」を発想のポイントとして主題構想をさせる。

導入段階では一般的に「はんこ」と呼んでいる道具が、実は「印一つで国家さえも動く」という東洋文化圏独自の価値を持つものであるということや、現在でも「自分を証明する大事なアイテムである」ことを学習して、「印」に対する東洋人的な思いを喚起させたい。そのことから、生徒がこれから制作する蔵書印が確かに自分だけのものであること、その印が押された書物が自分にとって大切なものであるという意識を強く持つことによって、制作（授業）に意欲的に取り組む態度を持たせたい。

古代の作例にも図象印というものがあるが、それ以上に現代篆刻の作品は実に自由なデザインのものが多い。中にはアルファベットやイラストを組み合わせたりしているものがあり、目を引く。そういう作例を見ることによって、生徒が自分の感性を發揮し、自分の価値感覚と古い文化を融合させて、より自分らしいデザインをしていくことを期待したい。

また、篆刻の制作は下描きである「印稿づくり」も独自の方法で行い、作業としては特にも「石を削る」という作業を伴う。これはほとんどの生徒が未経験である以上、材料の特性や道具の正しい使用法について徹底する必要がある。

この題材の前に取り組んだ「自画像の制作」では、これまでに身に付けたことを個々に發揮させることを主眼としていたため、「自分と向き合う」ことを大事にし、授業の中での相互評価や高めあいといった生徒同士の意見交換を仕組むことを、あえて積極的には行わなかった。しかし、今回の題材では、技法の特性上、道具（鉄筆）の使い方の習熟度が作品の出来栄を左右するばかりでなく、制作の途中で余計に「思いと表現のギャップに苦しむ生徒」が出るものと予想している。そういうことから、生徒の制作に関しての基礎的な技能を高めていくことができるよう、また、より自由なデザインをさせたいということからも構想の段階から相互の高めあいを意図した授業を展開していくことが必要であると考えている。

3 単元（題材）の目標

- (1) 自分の生活の中に自作の篆刻作品を取り入れていこうという意識を持ち、構想から制作まで、困難を乗り越えようとする意識を持って学習に取り組むことができる。
- (2) 自分自身の読書経験や愛書意識等を反映させて使用目的を良く考え、自分らしい印面のデザインを構想することができる。
- (3) 印稿の制作方法や篆刻刀（鉄筆）の使い方など、篆刻ならではの技法を身に付け、構想を生かして自分で満足いく作品を仕上げることができる。
- (4) 東洋文化圏に生きる人間として、文化としての篆刻への理解を深めることができる。他者の表現のよさを理解すると同時に、自分の個性を再発見することができる。

4 単元（題材）の指導計画・評価計画

時間	ねらい・学習内容	評価観点Ⅰ	評価観点Ⅱ	評価観点Ⅲ	評価観点Ⅳ	評価方法
1	ガイダンス 篆刻の歴史について学ぶ	篆刻の歴史に興味を持ち、意欲的に授業に参加していたか。			篆刻の歴史的背景を知り、文化理解を深めることができたか。	・作品法 ・観察法 ・自己評価法
2	蔵書印とはどういう印か 「読書と私」について考える	蔵書印の使用と自分の生活を関連付けて考えようとしていたか。	「読書と私」について考えたことをもとに、蔵書印に刻む文字を検討することができたか。	篆書字典から探した文字を学習シートに鉛筆で書き写すことができたか。		・作品法 ・観察法
3	篆書を筆で書いてみる (字法の段階)	篆書の美しさや面白さに興味を持って取り組むことができたか。	字体の特徴やバランスよく書く方法を理解することができたか。	定められた枠内に、バランスの良い篆書体を書くことができたか。	小篆や印篆などの篆書体の持つ形の美しさや面白さについて感じ取ったことを発表することができたか。	・作品法 ・観察法 ・自己評価法 ・相互評価法
4	印面の図案を考える。 (章法の段階)	自分なりのデザインを心がけ、納得するまでいくつもの案を出そうという意欲を持つことができたか。	過去の作例等から学びながらもオリジナル感のあるデザインを構想することができたか。	いくつもの案を検討して、自分のイメージどおりの印稿を制作することができたか。	級友の作品のよさや面白さに気づき、感じたことを発表することができたか。	・作品法 ・観察法 ・自己評価法 ・相互評価法
5						
⑥						
7	印材への布字を行う	印稿を良く見ながら丁寧に布字をしようという意欲を持つことができたか。	「左字」で布字を行うということについての注意点を意識して取り組むことができたか。	用具を正しく使用して、印稿通りの布字をおこなうことができたか。		・作品法 ・観察法 ・自己評価法
8	印面の彫りを行う (刀法の段階)	鉄筆の使い方を身に付けようと、集中して説明を聞くことができたか。	鉄筆の正しい持ち方や彫りのすずめ方を理解することができたか。			・作品法 ・観察法 ・自己評価法 ・相互評価法
9		作品に愛着を持ち、妥協せずにより良い作品を生み出そうという意欲を持つことができたか。	「線の美しさ」を意識し、作品と印稿とを常に比較しながら彫りの構想を立て、取り組むことができたか。	・材料の特性や道具の使い方を理解し、彫りの基礎的な技能を身に付けて、制作を進めることができたか。	級友の作品のよさや面白さに気づき、感じたことを発表することができたか。	
10			・「試し押し」した印面を検討し、イメージをさらに深めることができたか。 ・古色仕上げの効果を理解して、作品をより味わい深いものにするための構想を立てることができたか。	・「撃刃」などの技術を取り組みに生かすことができたか。		
11	印箋を制作し、味わう	制作を通し、自分の生活に「蔵書印」を取り入れていく意欲を持つことができたか。	押印と文字のバランスを考えて仕上げる構想を立てることができたか。	朱肉の使い方を理解し、美しく押印することができたか。	自他の作品から感じたことを発表することができたか。	・作品法 ・観察法 ・自己評価法 ・相互評価法

5 本時について

(1) 主題

印面の構想を交流・相互評価をし、自分のアイデアを推敲する。

(2) 目標

自分の作品がもっと良くなる可能性について考えよう

(3) 指導の構想

導入段階で篆刻の歴史に触れた結果、「印」に関しての東洋的な価値感覚についてはある程度理解させることができた。また、篆書字典を見て篆書の形の面白さに興味を持った生徒が多く、全体的に意欲的な姿勢で題材と向き合っている。

これまでの学習では、篆書体に愛着を感じさせながらも「それ以外の表現」の可能性にもふれて幅広い表現を示して揺さぶりをかけてきたが、きっぱりとした意志を持って、作品の個性を明確に追究していく姿勢を持たせたい。本時の指導では、作品の相互鑑賞の中で級友からの助言を参考にし、また級友の作品について考えることを通して、自分の取り組みを見直すきっかけにしたいと考えている。

(4) 本時の展開

段階	学習活動	学習内容	時間	指導上の留意点
導入	1 あいさつ 2 前時の想起 3 課題提示	1 元気にあいさつをする 2 字や枠の線の表情、イラスト等のパーツを工夫してアイデアスケッチがまとまってきたことを確認	5分	※班隊形で始業 ★前時の資料の提示 ☆電子黒板を使用
	作品が「もっと良くなる可能性」を探ろう			
展開	4 相互鑑賞	4 相互鑑賞に取り組む ①相互鑑賞の観点について、確認する ○良いところを素直に評価する ○作者の制作メモをよく見る ○もっと良くなるように、アドバイスをする ②「今日の個人目標」を設定する ③班内で相互に鑑賞する手順を理解する ・全員分を中央に並べ、全員で見る ・気づいたことは自由に発言して良い ・自分の作品以外の全員分について、個々に考えたことを付箋紙に記入し、貼付する ・司会は班長が行う ④班毎に相互鑑賞を行う	7分	<input type="checkbox"/> 聴き取る力を高める ・本時の課題から、見る観点を考えさせてみる ・メモをとる活動 ☆どのような時間にしたいか ☆教師による指示 <input type="checkbox"/> 自分の考えを明確にする ・付箋紙を利用した意見交流 ・相互鑑賞シート
	5 自分の制作について考える	⑤自分の作品がもっと良くなる可能性について考え、プリントに記入する	20分 8分	☆机間指導 教師も付箋を持って歩く <input type="checkbox"/> 自分の考えを明確にする 相互鑑賞シートに記入
終結	6 学習の振り返り	6 ①自分の制作について考えたことを発表しあう ②授業の自己評価をプリントにまとめる	10分	<input type="checkbox"/> 確かに伝達する力 学習シート・相互鑑賞シートの活用 ☆生徒作品はビデオ投影
	7 まとめ	7 本時のまとめをし、次回は「印稿」を完成させることを確認する		
	8 あいさつ	8 元気にあいさつをする		